
ここにいる

文月純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ここにいる

【Nコード】
N5865Y

【作者名】
文月純

【あらすじ】
インターネットで出会った二人の、なにげない特別な日。

『もうすぐつくー』

たった七文字のメールに、ここまで心が踊ったことはなかった。駅の改札前に立ち、少女はケータイを一心に覗き込んでいる。

肩まで伸ばした髪は淡い栗色。自腹を切って、初めて色素を抜いてきた。グロスも少しだけ高いものを買ってみた。今日だけのために、一ヶ月分のお小遣いはほとんどなくなっていた。

せわしなく電話のボタンを押す。柱によりかかっているが、両肩は動きを止めようとしない。少し口紅を塗りすぎた口元は、花のようになつくと開いたと思ったら、つぼみのように固くすぼめる。忙しく変わり続ける多感な表情は、あどけない感情をまとめて塗りたくったような、複雑な色合いを描いている。

ありふれた、異性とのはじめてのデート。

相手が「インターネット上で出会った人」ということを除けば、花も羨む思春期の一ページそのものだ。

ケータイを閉じて胸元に引き寄せる。

高い天井を見上げ、深いため息をつく。

少女が彼を知ったきっかけは、とあるマイナーなバンドに関する会話。なにげなく語っていたら、その人が話の中に入ってきた。

不思議と気が合った。そのバンドだけじゃなく、いろんなことでささいな日常に関することでも、言葉を重ねていた。ドラマチックな出来事はなにもない。気がついたら彼と話す日常があつて、気がついたら彼のことを考えていて、気がついたらその思いは重かった。メールアドレスを交換したのはつい先週のこと。その時の自分は、ここまでなるとは考えすらしていなかった。

ちよつとだけ、早めなのかな。

そう思う自分に下心がなかったと言うのは、嘘になるのだけれども。

なだれ込んでくる足音に全身が反応を示す。

階段を降りて、さまざまな人たちがこちら側へ向かってくる。

あの中に、いるのかな。

改札の向こう側を眺める。

胸に渦巻く気持ち、期待一色じゃないことに、最初は不安をおぼえていた。

『改札でたすぐそこにいるよー』

メールの返信の一つ一つを、これほど心待ちにしたことはなかった。

窓の向こうをもどかしそうに眺めながら、少年はケータイをズボンにポケットにしまう。

耳が少し隠れるくらいに伸びた髪は、ところどころ人工的な跳ね方をしていて、不自然なくらいに光を反射している。整髪剤を使ったのは初めてだった。

一度しまった電話を再び取り出して開く。電車のアナウンスを聞きつつも、届いたメールを前にして、硬直しながらも、時折小さな笑みを漏らす。ボタンを押そうとする親指はなかなか到達せず、来たり戻ったりをくり返し、数字の上で踊っている。

彼女も言っていたが、異性とデートなんてはじめて。

ましてや、「インターネット上で出会った人」と会うなんて、どこかの舞台から飛び降りる気分だ。

結局、一回もボタンを押さずに再びケータイをポケットへ押し込む。

まもなく目的地に到着する、という車内のアナウンスを聞き、背筋を伸ばしてしまう。

最初は、同じ趣味の人、としか考えていなかった。異性だと知っても、特に変わらないだろうと思っていた。瞬間で惚れてなんていない。気がついたら彼女と話す日常があつて、気がついたら彼女のことを考えていて、気がついたらその思いは重かった。

メールアドレスを交換して一週間。言い出すのに、どれだけの勇気を投げ打ったかおぼえていない。

まちがって、いないよな。

下心はあったものの、ここまで早い展開になることは考えてもみなかった。

流れ込んでくる騒音に体が跳ね起きる。

もまれながらも、様々な人であふれ出しそうな構内に足を踏み出す。

どこに、いるんだろう。

下見をしていなかった不安だと、最初は思っていた。

『駅広くて迷った。ちょっとだけ時間かかるかも』

彼からの連絡がくる間に、少女の胸はびりびりとちぎれそうになっていた。

彼の顔を知らない。それはさして問題じゃないと思っていた。

人、人、男、男、男、おとこ、オトコ。

どれが彼なのか、分からなかった。

同年代ということは知っている。だけどそれ以外はほとんど知らない。彼女が知っている「彼」は、インターネット上の名前と、そこで使っているアイコン——本人となにも結び付かない画像だけだった。

そこまで考えて、一つの悪い予想が立ってしまふ。

本当に、同年代なのかな？

顔が見えないネット上で、嘘をつくのはあまりにも簡単だ。今まで嘘をついたことがなかった彼女だって、何回か嘘を言っている。

あの人も、嘘をついていたら。

彼が自分と同年代という保証は、自分の中にしかない。

何度目かわからない足音の波。

顔を上げるだけで、首をしめつけられているよう。

視界に、ふと入ってしまった、オトコ。

頭はバーコード。上下は灰色。不格好なメガネ。膨れ上がった腹。この中年が、「彼」ではないと、言い切れる？

とつさに右手で口をおさえる。

想像もしたくなかったものが、溶岩のように押し寄せてきて、せきとめられない。

『ごめ ちよつと気分悪くなった。動くね』

改札を出た直後に届いたいびつな返信が、押し上げてくる不安を加速させる。

顔を知らない彼女を探すなら、着いたと連絡して、どこにいろとか、どんな格好なのかを聞き出せばいいと思っていた。気分が悪いならせひ休んでほしい。戻ってくるまで待てばいい。

同年代ということも分かっている。心配することなどないはずなのに。

何度も何度も首を横にふるう。

手でつかめるなら、髪の毛の何本か抜けてもいいくらいに、その疑念をひきはがしたい。

もどかしさは不安を増幅させるだけだった。

本当に、彼女はいるのか。

彼女は家において、自分の道化っぷりを楽しんでいる、というのなら、まだ許せるとすら思える。

もし、彼女が実在しないとしたら。

少年の中の「彼女」は、インターネット上で発していることばと、飼い猫と思われる写真を用いたアイコンだけで作られている。

それらのパーツが、嘘偽りないものだと言い切れるのだろうか？自分が今まで「彼女」だと思って見てきたものの全てが架空だとすれば、今まで一体なにとふれあっていたのか？

いま、一体なにを追い求めている。

数えきれない人が交錯する中で、どこにもいない存在を探しているかもしれない自分。

目の前に人はいない。

本当に別の場所へ移動しただけなのか。はじめからここに立つ少女などいないのか。

足元を、捨てられたチラシが吹き流されていく。

三十分くらいの間、少女と少年の間には一通もメールがやり取りされなかった。

『大丈夫？』

沈黙を破ったのは少年だった。

さらに五分ほどの空白。

『駅前のマックにいる』

それからしばらく連絡は途絶える。

口紅がほとんど落ちていることによりやく気がつく。

そんなに顔を洗っていたつもりは、少女にはなかった。

内から湧いてきた強烈な不快感のせいで、なにをしていたか、そもそもおぼえていない。

店内の陽気なBGMとやかましい話し声が混ざり、縮こまって座っていたら、この体が簡単につぶれて紛れ込めてしまいそうだと思った。オレンジジュースには一口も手を付けていない。

もう帰ろうか。

時間を確認しようとケータイを開く。

新着メール、一件。

『ついたよ』

一瞬、その四文字が読めなくなった。

ハンバーガーを頼んだのが自分だったことを忘れていた。最初に目についた、百円のものだ。

混雑の中で席につく苦勞を味わって、しばらくは呆然と包み紙を眺めていた。

あたりを見回す。少年と同年代の少女はたくさんいる。

左から高校生たちのやかましい話し声が耳にたたきつけられ、右から喫煙スペースの鼻につく臭いが押し寄せてくる。

なんでここにいるんだろう。

ハンバーガーに右手を伸ばそうとすると、電話が震えた。

とつさに持ち替えた手に、背骨に、心臓に、足に、振動が伝わっていく。

『ごめん　なんか　こわくなった』

スペースが使われる彼女の文を、見たことがなかった。

少しだけ震えがおさまる。文面の形になのか、それとも内容なのか、どちらに安心しているのかは分からない。

だけど、彼女は。

『大丈夫だよ』

たった五文字を打つ時間が、重く、濃く流れていく。

『ほんとに、ごめんね』

ボタンを押しながら、顔を伏せる。

誰にも見えないように、でも悟られないように。まぶたを強く閉じて、送信したことを頭の中で何回も何回も唱え続ける。

なんにも見えない。だけどまだ見ぬ彼の姿を必死に見ようとする。見ようとしても、にじんでしまう。それでも、見ようとした。

握りしめたケータイがうるさく電子音を鳴らす。

『僕も、こわいから』

そんな言葉を、彼は私にかけてくれる。

疑いはまだある。怯えだってまだ残っている。だけど、彼だって。

顔を見せないことに、自分たちは慣れてしまっていた。今まで信賴してきた相手なのに、こんなにも顔を見せることがこわい。

想像とはちがうことへの恐怖。

実在していないことへの恐怖。

「自分の中の相手」を守りたい。
だけど——それは本当に、「好き」なのか？

『ここに、いるんだよね』

少女は、少年へと問いかけた。

『僕は、ここにいるよ』

少年は、ゆつくりと答えた。

『ここに、いるんだよね』

少年は、少女へと問いかけた。

『私は、ここにいるよ』

少女は、ゆつくりと答えた。

バカバカしいぐらいにロマンチスト。普通の、インターネット上ではありえないやりとり。ボタンを押しながら、少しだけ笑みがこぼれたほどだ。

だけど、自然と受け入れられた。

『ねえ、写メ交換しよ？』

ハンバーガーの包み紙を丸めながら、少年は、いつもの彼女を見たような気がした。

『顔？』

たった二文字。返ってくる軽さを、少女は何年ぶりにも感じたような気がした。

『手、あたりにしない？』

入力する指遣いが軽快だと思えるようになった。だけど、いつもの軽さとはちがう。それはきつと向こうだって。

『じゃあさ、手のひらに名前書こう』

突飛な返し方も、いつもなら当たり前。そんな雰囲気、今ではとても暖かい。

ペンを取り出し、大きく名前を書いていく。

申し合わせたわけでもなく、いつものネット上の名前と、本当の

名前。

メールを閉じて、カメラを起動する。

相手に伝える最初の自分が、小さなフレームへと収められていく。
もうひとつの撮影音が、どこかで鳴った。

(後書き)

もう恋愛モノなんて書かない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5865y/>

ここにいる

2011年11月17日03時12分発行